様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２７日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720205
研究課題名（和文）　シャイロックの居場所－近世ヴェネツィアのゲットーとユダヤ人－

研究課題名（英文）　The Ghetto and Jews in Early Modern Venice

研究代表者
藤内　哲也（TONAI TETSUYA）
鹿児島大学・法文学部・准教授
研究者番号：60363602

研究成果の概要：本研究では、近世ヴェネツィアにおけるゲットーの成立と拡大の過程を跡づけるとともに、キリスト教徒によるゲットーやユダヤ人についての言説を分析し、そこに高利貸しとしての伝統的なユダヤ人像や都市ヴェネツィアのイメージが投影されていることを明らかにした。また、近世イタリアの都市空間におけるゲットーの位置について比較検討することで、ヴェネツィアのゲットーにはユダヤ人の「隔離」と都市中心部からの「排除」という性格がともに認められることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００４年度			
２００５年度			
２００６年度	1,100,000	0	1,100,000
２００７年度	800,000	0	800,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	2,700,000	240,000	2,940,000

研究分野：近世ヴェネツィア史
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：イタリア　ヴェネツィア　ゲットー　ユダヤ人　トマス・コーリャット
レオン・モデナ　アシュケナジム　セファルディム

１．研究開始当初の背景

本研究の当初の目的は、16 世紀初頭のゲットーの設置にいたるヴェネツィアのユダヤ人政策や、ゲットーに暮らすユダヤ人について、他のイタリア諸都市との比較も念頭に置きつつ、あくまでヴェネツィア都市史の文脈において検討するという点にあった。そこには、従来の研究史において、都市国家ヴェネツィアの経済や社会生活のなかで、ユダヤ人が一定の役割を果たしたことが指摘されながらも、都市史研究とユダヤ史研究の成果とが必ずしもうまく接合されず、またわが国に

おいても本格的な研究が乏しいという背景があった。

そもそも、ゲットーの設置や拡大によるユダヤ人の隔離といった、ヴェネツィアにおけるユダヤ人政策の展開については、単に権力側による一方的な差別や排除という側面からのみ捉えることはできない。というのは、15 世紀まで原則として都市内での居住が認められていなかったユダヤ人金融業者をゲットーに定住させることには、都市民の反ユダヤ感情に配慮しつつも、むしろユダヤ人の経済的有用性を利用したいヴェネツィア政府の思惑があったと考えられるからである。また、16 世紀中葉においてオスマン帝国の支配領域で活動していたユダヤ人商人は、ヴェネツィア市内での拠点獲得のために、自らの居留地の付与を希望し、その結果ゲットーが拡大されたのであった。

このような事例から考えれば、ヴェネツィアのゲットーは、単なるユダヤ人の隔離や差別の結果であるというよりは、当局による隔離と統合や排除と保護、ユダヤ人による積極的な受容や抵抗といった、相互に矛盾する要素を含んだ、両義的な政策として理解されなければならないだろう。しかも、ヴェネツィアにおけるゲットーの設立が、16 世紀中葉以降の対抗宗教改革の進展にともなうローマ教皇庁の「不寛容」の影響とされるイタリア諸都市でのゲットーの普及に先行していることから考えれば、近世ヴェネツィア都市社会における権力行使のあり方や社会構造の変容といった文脈と関連させながら、ユダヤ人政策の展開過程や、そこに暮らすユダヤ人の日常性やキリスト教徒との関係性、ゲットーやユダヤ人をめぐるキリスト教徒側の表象やその変化といった点が問われる必要があるだろう。

こうした見通しに立って、本研究は、研究代表者がこれまで取り組んできた近世ヴェネツィアの政治社会史と、マイノリティとしてのユダヤ人共同体の（苦難の）歴史としてのユダヤ史研究の成果を接合し、近世ヴェネツィアの政治、経済、社会のあり様とその変化をより具体的に描き出すために計画されたのである。

２．研究の目的

ヴェネツィアの支配層や都市民、あるいは旅行者のキリスト教徒と、ゲットーに暮らすマイノリティとしてのユダヤ人との間の支配と被支配、抑圧と保護、統合と自立、受容と抵抗といった、多様で可変的な関係性を実態的に明らかにすることを目的として、本研究では、研究計画調書において具体的に以下のような課題を設定した。

①ゲットー設置の目的と、その政治的・経済的・社会的背景

②ヴェネツィアの権力構造におけるユダヤ人政策の位置づけと寡頭支配層との関係性

③同時代史料におけるユダヤ人やゲットーの表象とその変化

④ユダヤ人に与えられた特権やその積極的な受容／ユダヤ人共同体内部の対立や差異

⑤ヴェネツィア領内の諸都市や、ローマ・フィレンツェとの共通点と相違点

これらの諸点について実態的に検討していくことで、近世ヴェネツィア都市社会における「上からの」権力行使の具体的なあり方としてのユダヤ人政策、すなわちゲットーの設立や拡大の展開過程とその背景について明らかにするとともに、ゲットーに暮らすユダヤ人の日常生活の諸相や社会的結合、ゲットーを取り巻く都市民やヴェネツィアを訪れる外国人旅行者といったキリスト教徒との関係性、ゲットーやユダヤ人をめぐるキリスト教徒側の表象やその変化などについて検討し、都市史研究の視点からヴェネツィアのゲットーとユダヤ人のもつ意義について考察することが本研究の目的であった。

３．研究の方法

本研究では、ヴェネツィア史、ユダヤ史における先行研究の成果や関連する史資料を収集、分析することにより、まず上記の課題のうち、①「ゲットー設置の目的と、その政治的・経済的・社会的背景」および③「同時代史料におけるユダヤ人やゲットーの表象とその変化」について、重点的に考察を行った。このうち、これまでにも一定の成果が蓄積されている①については、おもに先行研究に依拠しつつ、ヴェネツィアの国立古文書館で確認できた史料を利用しながら考察を進めた。

一方、③の課題については、ヴェネツィアを訪れた外国人旅行者、とりわけイングランドからやってきたＴ・コーリャットの旅行記におけるゲットーとユダヤ人に関する記述に着目し、それとヴェネツィアの知識人によるゲットーの記述とを比較して、それらの言説にみられる共通点と差異を明確にすることで、ヴェネツィアのゲットーとユダヤ人について表象に関する新たな知見を得ることができた。

また、研究計画時に設定した課題⑤「ヴェネツィア領内の諸都市や、ローマ・フィレンツェとの共通点と相違点」については、とくに都市の空間構造におけるゲットーの位置

づけについて現地調査を実施した。その際、調査をより効果的に進めるために、ヴェネツィアおよびその支配下にあったパドヴァ、ヴェローナ、ヴィチェンツァの各都市以外の現地調査の対象を、当初想定していたローマやフィレンツェといった近世イタリア諸国の首都的な都市ではなく、ヴェネツィアにより近く、ユダヤ人の活発な活動が展開されていたボローニャとフェッラーラ、およびヴェネツィアよりも早くゲットーが成立したドイツのフランクフルト・アム・マインに変更した。そして、各都市の旧ゲットー地区の立地や景観について比較することで、ヴェネツィアのゲットーに見られる特徴や性格について考察した。

なお、研究計画時における課題②「ヴェネツィアの権力構造におけるユダヤ人政策の位置づけと寡頭支配層との関係性」や④「ユダヤ人に与えられた特権やその積極的な受容／ユダヤ人共同体内部の対立や差異」については、本研究において実施した①、③、⑤に関する検討と関連して、一定の知見は得られたものの、残念ながらさらに考察を深めることはできなかった。

４．研究成果

本研究では、まず、ゲットーの設置・拡大の目的と、その政治的・経済的・社会的背景について、B. Ravid の業績をはじめとする先行研究やヴェネツィアの国立古文書館所蔵の史料を検討した結果、アシュケナジムのユダヤ人金融業者を対象とし、都市内での定住を認めつつも、都市民の反ユダヤ感情に配慮してユダヤ人を隔離した 1516 年のゲットー設立時と、セファルディム、すなわちイベリア半島出身者を中核とするレヴァント系ユダヤ人商人の誘致を目指す 1543 年・1633 年のゲットーの拡大時では、その目的や背景が大きく異なっていたことが確認できた。この点は、アシュケナジム系に対する抑圧とセファルディム系に対する優遇というイタリア各国のユダヤ人政策におけるダブル・スタンダードが、ヴェネツィアにも共通して見出されることを意味するが、しかしながらユダヤ人政策におけるその二重性が、ゲットーという一つの場に集約されている点にヴェネツィアのユダヤ人政策の大きな特徴があるという見通しを得た。

次に、ヴェネツィアのゲットーとユダヤ人についての表象やイメージについて考察するために、英語文献において初めて「ゲットー」という用語を紹介した 17 世紀初頭のイングランド人旅行者Ｔ・コーリャットの旅行記における記述について、ヴェネツィアの人文主義者Ｆ・サンソヴィーノが著したヴェネツィアの案内書における言説と比較しつつ検討した。その結果、コーリャットがレヴァント系ユダヤ人の富裕さや、信仰に対するユダヤ人の真摯な態度を肯定的に捉えながらも、ユダヤ教信仰にはまったく理解を示していないこと、またそこに現れる高利貸しとしての伝統的で典型的なユダヤ人像は、同時代のヨーロッパ世界に広く流布していたユダヤ人観やヴェネツィア観に強く影響され、規定されていることを明らかにした。なお、この成果は、信州大学で開催されたイタリア中・近世史研究会において口頭発表したうえで、論文「あるイングランド人旅行者の見たヴェネツィアのゲットー―トマス・コーリャットの旅行記から―」として、『鹿大史学』誌上に公表した。

つづいて、ヴェネツィアのゲットーにおけるユダヤ人の日常生活、とりわけその社会的結合のあり方について、17 世紀初頭のラビ、レオン・モデナの『自伝』を史料として検討した。その結果、レオン・モデナが基本的には自らが属するアシュケナジム系ユダヤ人のネットワークの範囲内で行動しつつも、宗教的・文化的な活動においてセファルディム系のネットワークとも接点を持っていたこと、またヴェネツィアの支配層やキリスト教徒の旅行者とも一定の関係を築いていたことが明らかとなった。他のイタリア諸国と異なり、ヴェネツィアではアシュケナジムとセファルディムが同じゲットーのなかで生活していたために、それぞれ独自の広がりを取っていた両者のネットワークが、相互に結びつく場として機能していた点に、ヴェネツィアのゲットーが有する特徴があるといえる。なお、この点については、富山大学で開催されたイタリア中・近世史研究会において、「近世ヴェネツィアのゲットーにおけるアシュケナジムとセファルディム―レオン・モデナの『自伝』から―」と題する口頭発表を行った。

さらに、ヴェネツィアの支配下にあった本土領諸都市（パドヴァ、ヴェローナ、ヴィチェンツァ）と、ローマ教皇領に編入される近隣の諸都市（ボローニャ、フェッラーラ）、およびヴェネツィアよりも早期にゲットーが設置されたドイツのフランクフルト・アム・マインにおける旧ゲットー地区の立地と景観について現地調査を行った。その結果、キリスト教徒からユダヤ人を隔離するという点についてはいずれの都市のゲットーにも共通するものの、都市の経済的な中心地に近接した従来のユダヤ人居住区をそのまま囲い込むような形で成立した他のイタリア諸都市の事例とは異なり、ヴェネツィアのゲットーは都市の周縁部に新たに設置されたことが明らかとなった。すなわち、他のイタリア諸都市では、ゲットーは必ずしも都市中

心部からのユダヤ人の「排除」という性格をともなうものではなかったのに対し、ヴェネツィアでは、キリスト教徒からの「隔離」と都市中心部からの「排除」という性格を併せ持っていたのであり、しかもこの点については、15 世紀後半に成立したフランクフルトのゲットーにも共通して見られる特徴であった。この成果については、研究ノート「近世イタリア諸都市におけるゲットーの立地と景観」としてまとめ、『鹿大史学』誌上に公表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）
①　藤内哲也「近世イタリア諸都市におけるゲットーの立地と景観」『鹿大史学』第５６号、９－２４頁、２００９年、査読なし

②　藤内哲也「あるイングランド人旅行者の見たヴェネツィアのゲットー―トマス・コーリャットの旅行記から―」『鹿大史学』第５５号、１７－２９頁、２００８年、査読なし

〔学会発表〕（計　２　件）
①　藤内哲也「近世ヴェネツィアのゲットーにおけるアシュケナジムとセファルディム―レオン・モデナの『自伝』から―」イタリア中・近世史研究会（富山大学）、２００８年８月２８日

②　藤内哲也「あるイングランド人旅行者の見たヴェネツィアのゲットー―トマス・コーリャットの旅行記から―」イタリア中・近世史研究会（信州大学）、２００７年８月５日

６．研究組織
(1)研究代表者
藤内　哲也（TONAI TETSUYA）
鹿児島大学・法文学部・准教授
研究者番号：60363602

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし